

Mahāvastu 諸写本の系統について

研究員 平林 二郎

Mahāvastu は「十地」や部派仏教から発展した仏陀観が説かれることから大乘仏教を思想的に研究する上で重要な位置にある経典である。また、Mahāvastu は、F. Edgerton が Buddhist Hybrid Sanskrit (仏教混濁梵語) を考察する際に最も重視した経典であり、梵語仏典を言語的に研究する上でも重要な位置を占めている。しかし、大半の研究者が Mahāvastu を研究する際に使用している Senart の校訂本には問題があり、再校訂の必要が指摘されている。

本発表では Mahāvastu の再校訂を行う際に、読みを判断する基準の一つとなる写本の系統について、Mahāvastu 唯一の貝葉写本 (Sa 写本) と貝葉写本にも劣らない読みを有する紙写本 (Sb 写本) と Senart が校訂に用いた 6 写本 (特に N 写本) がどのように関係するかを中心に考察を行った。(Mahāvastu の各写本については湯山明氏が詳細を研究を行っており、略号などは以下の論文に従った。「Mahāvastu-Avadhāna—原典批判的研究に向けて—」『国際仏教学高等研究所年報2』(1999, pp.25-29)。

『国際仏教学高等研究所年報2』(1999, pp.25-29) Mahāvastu 諸写本の系統を扱った先行研究は、Senart と岡野潔氏が Senart 校訂本で使用した 6 写本の関係を論じているのみであり、6 写本の系統は B 写本と A 写本と N 写本の系統と、C 写本と M 写本と L 写本の系統の二系統に別れることが指摘されている。

先行研究を踏まえ筆者が Sa 写本、Sb 写本、N 写本の関係を研究した結果以下の内容が明らかになった。

Sa 写本は他の写本にはない読みを有している。また、Sa 写本と Sb 写本だけが一致する読みが多くある。さらに、他の写本では誤って書写されている部分が Sa 写本のみに正しく書かれている部分が見られる。

Sb 写本は Sa 写本とだけ一致する読みを有し、また、Senart が校訂に使用した B-A-N 系と C-M-L 系の両系統の読みを有している。

N 写本については筆者が改めて考察を行ったところ新たな発見があった。N 写本の後半部分は先行研究の通り B 写本と A 写本の劣化した読みを有するものであった。しかし、N 写本前半部分には Sa 写本と Sb 写本と N 写本のみが同じ読みを有している部分が見られた。

これらの情報から総合的に判断すると Sa 写本と Sb 写本は Senart が校訂に使用した写本より Mahāvastu のオリジナルに近い位置にある写本だと考えられる。また、Sa 写本 (および N 写本の一部) だけが他の写本とは別の系統である可能性が高いことが判明した。この他、N 写本については N 写本の筆写者が B-A 写本系統の読み修正した可能性もあるが、Sa 系統と Sb 系統の 2 写本を見ていた可能性もあることがわかってきた。

今後の研究課題として Sa 写本、Sb 写本、N 写本の関係を確定し、本発表で使用した以外の写本についても系統を明らかにしていきたいと考えている。